

## 巻頭言

### －まずはやってみること－

2015年度は、私ども外国語教育基礎研究部会の例会と同日開催で、「中部地区卒業論文・修士論文発表会」を中部地区英語教育学会との共催というかたちで開催することができました。17人の学部生・院生の方にご発表いただき、大変な盛会となりました。自分の学位論文研究について発表したり、他大学の院生の発表を聞いたりするなかで、発表者の方々にとって、普段の授業やゼミでは得られない学びや刺激を得られた、そういった体験になっていれば幸いです。人前で発表する機会というのはとても緊張することですし、不安なこともたくさんあります。私も数えるほどしか学会発表の経験はありませんが、いつでもとても緊張しますし、前日はなかなか寝つけないことも多いです。それでも、発表のあとに、「しなければよかった」と後悔したことは一度もありません。自分の不甲斐なさや実力のなさに打ちひしがれることはあっても、その経験をしないで先に進むよりは、自分を成長させることができると思うからです。論文の投稿に関しても同じです。自分の論文をあとで読んだりすると（恥ずかしくて目を背けたくなりますが）、その当時は気づかなかった間違いに気づいたり、表現や構成を直したいという感情に駆られるのも、書いていたときよりは少し成長しているからなのかなと思います（いや、「そう思わないとやってられない」というのも多分にあるのですけれど）。

私は、「やってみませんか」、「やりませんか」、という声がかかったときには、それが自分を成長させてくれる機会であると思える限り、チャレンジすることを心がけています。私がそう思うようになったのは、埼玉大学教育学部時代の恩師である及川賢先生のお話を聞いてからです。及川先生は、「誰かに見られているという場を自分から求めていくことが大事」とおっしゃっていました。そういう機会を求めることで、自分の日々の仕事を振り返ることもできますし、それに向けて頑張ろうという気持ちにもなります。そして、それが自らを高めることにつながっていきます。

私は、勉強会への参加も近いものがあると思っています。自分の知らない環境に飛び込むのはとても勇気があるものです。しかし、最初に勇気をもって行ってみると、たくさんの出会いがあり、また学びがあり、自分の可能性も広がっていくように感じられます。

外国語教育基礎研究部会の週例会や年次例会、そして中部地区卒業論文・修士論文発表会が、「誰かに見られているという場」として、たくさんの方を成長させる機会となることを願っていますし、このような会が今後も続いていくことを願うばかりです。しかし、願うばかりでは何も続いていきませんので、誰かが「続け」なければ、ならないのでしょう（その「誰か」が誰なのか、ですよ）。そうして何年か続けていくなかで、持続可能なかたちになっていき、そしてその後も「続く」、あるいは「続いていく」ものとなるのだと思います。基礎研も発足から3年が経ち、4年目を迎えました。皆様からの温かいご支援に感謝いたします。今後ともかわらずお引き立てのほど、よろしく願いいたします。

田村 祐

名古屋大学大学院国際開発研究科博士後期課程

日本学術振興会特別研究員（DC2）

外国語教育メディア学会中部支部外国語教育基礎研究部会部会長